

話す喜びや自信が生まれる国語科学習

——スピーチを取り入れた授業の創造——

若岡 朋美

一、はじめに

私が二学期にがんばったことは、二つあります。

一つ目は発表です。一学期には自信がなく、手を挙げるときには時間がかかってしまいました。二学期になったら国語での発表会や、計算、わかったことなどに手を挙げることができました。そして、発表にも自信がついて楽しく感じるようになりました。

二つ目は、自由勉強です。(以下略)

右記は、A子が二学期の終業式に全校生の前で発表した「二学期がんばったこと」である。A子は学級の中ではほとんど仲間と会話することのできない緘黙傾向の児童であった。そのA子が、全校生

の前でスピーチできるまでに成長してきた。A子は四月当初、自分から挙手することはほとんどなかった。話すことに自信のなかったA子が、学級の仲間たちの「Aちゃん、がんばって。」という思いに支えられ、国語科でのいくつかのスピーチを通して、話すことに自信をつけてきたのである。そして今では、スピーチが大好きで、みんなの前で話すことが楽しく感じられるようになっている。

昨年の四月に出会った四年四組の子供たち(男子十七名 女子十七名)は、とても明るく、学習にも遊びにも精一杯取り組む子が多かった。また、休み時間になると「先生、今日ね動物村のウサギがね…。」「先生、昨日〇〇君と一緒に釣りに行ってね…。」といったように「話したい。」「聞いてほしい。」という思いをいっぱいもって目を輝かせながら教師のところに来てくる。しかし、いざ授業の場面になると進んで挙手する子は少なかった。話すことが大好き

で休み時間や給食の時間にはあんなに生き生きと話す子供たちがな
ぜ授業になると話せなくなってしまふのだろうか。私が教師になっ
て三年間、毎年四月になるとそのことを考えているように思う。国
語科に限らず授業をするとき、自分なりの考えや意見をしっかりとっ
ている子は多く、「この考えをみんなに広めてほしいなあ。」と教師
が思うこともしばしばある。授業の中で自分の思いを話せない子も
「話す内容」はしっかりともっていることが分かる。つまり、子供
たちは話したい内容をどうやって話したらよいか分からないので
ある。

日常生活の中で「話したいなあ。」という思いをいっぱいにもって
いる子供たち。そんな子供たちが学級みんなの前で話すことに喜び
を感じ、冒頭のA子のように「話してよかったな。」「みんなの前で
話すことって楽しいな。」という思いをもつ姿を願ひ、実践に取り
組んだ。

二、研究仮説とその手立て

国語科学習の様々な場面でスピーチを位置づけ、仲間や環境とか
かわる学習活動を取り入れ、個の話し方に対する評価と支援を工夫
すれば、話す喜びや自信が生まれると考え、次のようなことを研究
内容として実践を行った。

- (一) 説明文で学習したことを取り入れたスピーチの位置づけ
- (二) 仲間・環境とかかわる中でスピーチを高める練習の場の
設定
- (三) 教師による評価と支援の在り方及び仲間同士の認め合い
の場の位置づけ

三、実践より

(一) 説明文で学習したことを取り入れたスピーチの位置づけ

説明文学習では、文章構成の方法などを理解するとともに、理解
したことを自分の表現の中に生かしていくことも大切である。「ど
うやって話したらいいかわからない。」そんな子供たちが説明文
習でつけた力を「話す力」へ移行することはできないかと考え、ス
ピーチを取り入れることにした。

①五月 説明文「キョウリウウをさぐる」

本実践は、教材文「キョウリウウをさぐる」の学習と、教室に設
置したキョウリウウに関する図書の読書活動を通してスピーチを取

り入れた実践である。

子供たちは、前教材「カブトガニを守る」と本教材で、わかりやすく説明するための手段として次のことを学習している。

- 全体をいくつかのまとまりに分ける。
- 「第一」、「第二」といった順序を表す言葉を入れる。
- 「なぜ」でしょうか。」というように、問いかけの言葉を入れる。

学級のほとんどの子供たちにとって、説明文の第三次でのスピーチは初体験である。初めからスピーチメモを作ることには抵抗があると考え、自分たちの調べたことをまず説明文（始め—中—終わりの三つのまとめり）としてまとめる活動を取り入れ、次のような過程を組んだ。

<ul style="list-style-type: none"> • 自分が読書で得た情報をもとに、説明文のメモを組み立てる。 	<ul style="list-style-type: none"> • メモをもとにして説明文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> • 自分が書いた説明文の中から、話したいことや大切なことを選び、サイドラインを引く。 	<ul style="list-style-type: none"> • サイドラインを引いたところをもとに、スピーチメモを作る。
	資料 I	資料 I	資料 II

(資料 I)

まとめ	いなくなったげんいん	問いかけ
<p>一つ目、二つ目という言葉をばりやく説明</p>	<p>二つ目のげんいんは火山がふんかしたことで、 たぐさんの火山がふんかして空には大きな雲ができました。火山がたぐさんふんかしたために、地球を守っていた空気のまがかやぶれ、光線がふりそそいだためです。</p>	<p>なぜきょうりゅうはいなくな、たのか 大さかしのめちとキキ、うりゅうがいた じだいは、三じゅう紀、ジュラ紀、はくあ紀 てす、なぜきょうりゅうがいなくな、たのか しゅうか 二つ目のげんいんは大きないん石が落ち てきたことです。 600万年前、地球にはとても大きないん石が おちてきました。木がかれ、えさのない草食</p>

「キョウリュウをさぐる」 名前：〃

課題

「話のつながりに気づけてスピーチのメモを作ろう。」

〃

くきょうりゅうがいなくなった理由

まとめ

いなくなったけんいん

一つ目、大きないん石がおちてきたこと

地球に、いん石がおちた、小さいいん石から、

二つ目、火山がふんかした、

たくさん火山がふんかした、地球を回すのを空気が

三つ目、ひょう雪がふりつた、

世界中の海が凍りつた、海が凍るといふことが、

まだけんいんは三つある、

いんげんいんてきょうりゅうはいなくなった、

これでもまだある。

（書く、わたしの話し方のめあて）

一分間のつちにきちんとして話す。

自分のスピーチはどうだったかな

話すめあてのより返り	一回目	スピーチ先	二回目	スピーチ先	三回目	スピーチ先	四回目	スピーチ先	五回目	スピーチ先	六回目	スピーチ先
話のつながりに気づけてスピーチできたか。	○		○									
話し方のめあてを守って、スピーチできたか。	○		○									

	10	35	10

子供たちは、読書から得たたくさんさんの情報を説明文として書いたことにより、自分の話したいことを明確にすることができた。そしてスピーチで話し切ったことに喜びを感じる姿が多く見られた。しかし、説明文から離れられず、スピーチメモの文が長くなり、「話す」活動が「読む」活動になりがちな面もあった。また、「いくつかのまとめり」以外に説明文で学習したことが十分に生きてこない面も見られた。

②十一月 説明文「手と心で読む」

国語科学習の中で、福祉にかかわった教材で学習するのは、本教材が初めてである。福祉について身近に考えられるよう、視覚障害の体験的活動を取り入れ、障害をもつ人の気持ちに迫ることと、子供たちの住む柳津町を採り上げることから「あったらいいなこんなもの」こうなったらいいな柳津町」の考えづくりをし、スピーチに取り組んだのが本実践である。

「キョウリュウをさぐる」のスピーチでは、自分の書いた説明文から離れられず「読む」活動になりがちだったため、今回のスピーチでは、説明文にまとめず、スピーチメモのみを作ることにした。

また、説明文で学習したことを取り入れられるよう、今回は学習したことの中から次の三点を使うことを約束としてスピーチメモ作

りに取り組んだ。

・自分の一番伝えたいことをはっきりとさせてメモの中に位置づける。

・問いかけの言葉を入れる。

・写真、絵などの資料の活用についてメモする。

スピーチメモを作るにあたっては、説明文学習が生きるよう「伝えたいことカード（ピンク色）」と「問いかけカード（黄色）」を用いてメモを作ることができるようにした。（資料Ⅲ―②）

M子は単元の導入で視覚障害体験をした後、自宅でもタオルで目を覆い視覚障害体験を試みるなど、障害をもつ人の気持ちに迫ろうと真剣に取り組み、日記を書いた。（資料Ⅲ―①）

視覚障害者に焦点をあて「こうなったらいいな柳津町」について考えを深めたM子は「柳津町に盲導犬がふえたらいいな」を主張として、スピーチに取り組んだ。スピーチメモの言葉も「キョウリュウをさぐる」の時に比べると、端的にまとめられるようになった。

多くの子がM子のように主体的に読書をしたり、町を歩いて調べたりして、真剣に考えづくりをすることができた。また、説明文学習を取り入れる姿が多く見られるようになり、中には町内の写真を

撮って資料にしたり、OHPを使ってわかりやすく発表しようとする姿もあった。さらに自分の話し方のめあてを意識して話そうとする姿が多く見られるようになった。

③十二月 言語小教材「方言と共通語」

本言語小教材は、短時間扱いで自分たちの言葉に目を向け、スピーチに取り組んだ実践である。

本教材の導入では、教師が飛騨地方の方言をクイズ形式で紹介することによって、子供たちへの興味づけをねらった。柳津では聞いたことのない言葉に子供たちは驚き、「いろんな地方の方言を調べてみたいな。」という願いをもった。そこで、他学級の友達に発表する「なるほど！方言発表会」を設定し、スピーチに取り組んだ。

スピーチの中にこれまでの説明文や小教材での既習事項を取り入れられるよう、既習事項を「わかりやすく説明するための道具箱」として掲示した。（資料Ⅳ）

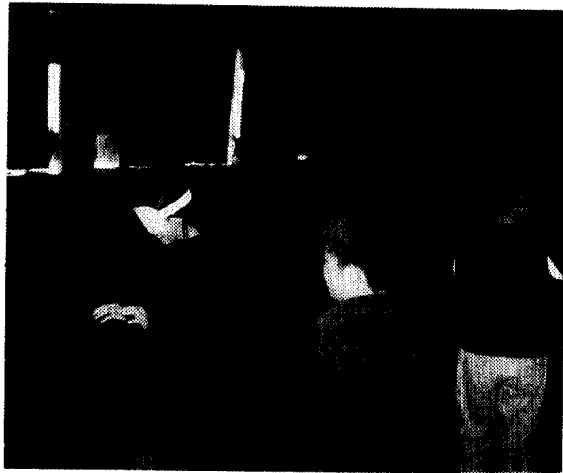
また、「手と心で読む」のスピーチ発表会の時の様子をもとに、もっと上手に話すためにはどうすればよいかを話し合い、全員共通の二つの話し方のめあて（聞いている人に伝わるような声の大きさで／聞き手の方を見て）を設定した。

他学級の友達に自分が調べた秘密を明かすことの楽しさから、ど

〈視覚障害体験 M子の体験日記〉 (資料Ⅲ-①)

今日私は、目にクオルをまいて、階段をあがってみました。階段はどこまで続いているのか分からなくて、とてもこわかったです。目かくしをして歩いていると後ろからだれかがつけてくるような気がして、むねが飛び出しそうでした。ヘレンはいつもこんな思いをしていたなんてびっくりしました。

これから少しでもヘレンの気持ちに近づいていけるようがんばりたいです。



- ・ 目が見えないって、こわいな
- ・ だなあ。
- ・ 安心して過ごすためにはどうすればいいのかな

考えづくり

〈たくさんの読書〉

- ・ 盲導犬がいると、気持ちにゆとりができるんだね。
- ・ 柳津町にも、盲導犬がふえるといいな。

〈「手と心で読む」M子のスピーチメモ〉 (資料Ⅲ-②)

私は、このことばをきいて、スビ・ナのマを作り、自分の心で読む。

☆ あったらしいな、こんなもの、こらあたらしいな、柳津町「発表会」一番伝えたいことは、

柳津町に「盲導犬」がふえるといいな。

発表会での自分のめあて

話し方を「ヘルプ」でせざるめあて

大きな声では、きくと話す。

ノ「あったらしいな、こんなもの、こらあたらしいな、柳津町「発表会」のスピーチメモ

みなさん、盲導犬を見た事がありますか？

聞へん言葉
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

考えたわけ
 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

柳津町に「盲導犬」がふえると、いいな。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

身につけたアイテムを使いこなそう!

わかりやすく説明するための道具箱

☆「キョウリユウをさぐる」

①三つのまとまりで説明(初めー中ー終わり)

(問題ー説明ーまとめ)

②順序を表す言葉

「第一の理由は…、第二の…」

③問いかけの言葉

「なぜでしょうか。」

☆「ニュースの時間です」

④役割を決めて、二人一組で(話をする人と感想を話す人)

(インタビュする人と答える人)

⑤楽しくなるような話題を選んで

☆「手と心で読む」

⑥一番伝えたいことをはっきりさせて(伝えたいことカード)

⑦問いかけの言葉

「みなさんは？」

⑧ものを見せながら

(写真、OHP、絵、本、やって見せるなど)

☆「方言と共通語」

⑨クイズを入れて楽しく

「では、問題です。」

⑩テープレコーダーを使って、生の声を

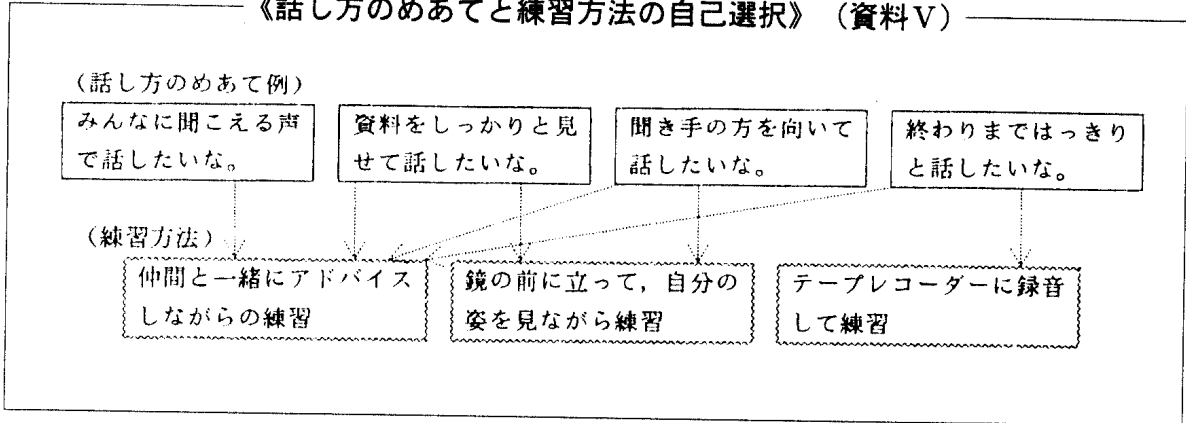
の子も意欲的にスピーチの準備に取り組んだ。また、絵を用いたクイズ形式で楽しくするだけでなく「問いかけの言葉や、一つ目二つ目の言葉を入れようかな。」といったように、多くの子が「分かりやすく説明するための道具箱」をもとに既習事項を取り入れることができた。

(二) 仲間・環境とかわる中でスピーチを高める練習の場の設定

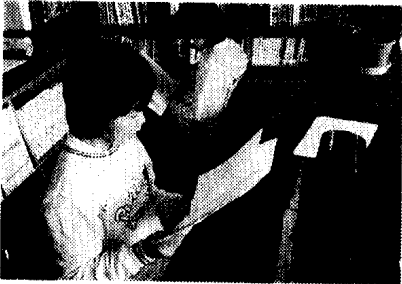
子供たちは、仲間と認め合ったりアドバイスし合ったりすることによってスピーチを高め、さらに仲間の前で話すことに自信をもつことができる考えた。またテープレコーダーやストップウォッチ、鏡などの環境にかかわることで、自分のスピーチを客観的に捉え、高めていくことができると考えた。そこで発表会の前時にスピーチ練習の時間を設定し、練習にあたっては、学級の仲間や環境とかわりながら練習に取り組むことができるようにした。(資料V)

また、仲間との練習で適切なアドバイスがなされるよう、スピーチを聞くときの着目点を設定した。(資料VI)に示すのは「手と心で読む」のスピーチ練習でのE子の姿である。初めはどうやって話したらよいのかわからず、スピーチメモを見て迷っていたE子は、

《話し方のめあてと練習方法の自己選択》 (資料V)



《スピーチ練習でのE子の姿》 (資料VI)

考えづくり	<p>[たくさんの読書]</p> <p>「目が見えない人は、私たちの知らないこんなことに困っているんだね。」</p> <p>「私たちには、どんなことができるのかな。…こんな手助けがあるんだね。こんなことができるといいな。」</p> <p>↓</p> <p>柳津町みんなが障害をもつ人にやさしくなれたらいいな</p>	<p>(こんなふうに話したいな)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「みなさんは障害をもつ人が困っていたら助けてあげられますか。」という問いかけを入れたいな。 ・話すときに、声の大きさや速さに注意したいな。(前時まで)
	<p>自分で練習</p>  <p>どうやって話したらいいのかな？ まずは自分でたしかめてみよう。 「私の伝えたいことは、この組み立てで伝わるのかな。」 「だからという言葉を入れた方が、わかりやすくなるかも。」 「話す速さはどうかな。テープで聞いてたしかめてみよう。」 「速くてわかりにくいな。間をを考えてもう一回練習してみるよ。」</p> <p>↓</p> <p>これで大丈夫かな？今度は友達に聞いてもらおう。</p>	
仲間と練習	<p>(仲間)</p> <p>「皆さんは障害をもつ人が困っていたら助けてあげられますか。障害をもつ人を助ける方法はいろいろあります。(中略)だから声をかける方法が一番です。最近では助けてあげる人が少ないと思います。だから私は柳津町みんなが障害をもつ人にやさしくなれるといいなと思います。」(E子)</p> <p>↓</p> <p>上手に話せるようになったよ。早く発表会で話したいな。</p>	<p>(仲間)</p> <p>「絵が見えにくかったから、絵を頭の上にあげて見せた方がいいと思うよ。2メートル離れていても、しっかりと声が聞こえていたからよかったよ。」</p>

内容がしっかりと伝わっているか、話す速さはどうかを確かめるため、テープレコーダーでの練習に取り組んだ。何度か練習を繰り返しE子は、次に他からのアドバイスをもらうため仲間とかかわった。仲間から声の大きさについて認められ、絵の見せ方など細かい点までアドバイスし合いながら練習する中でE子はスピーチに自信をつけていった。

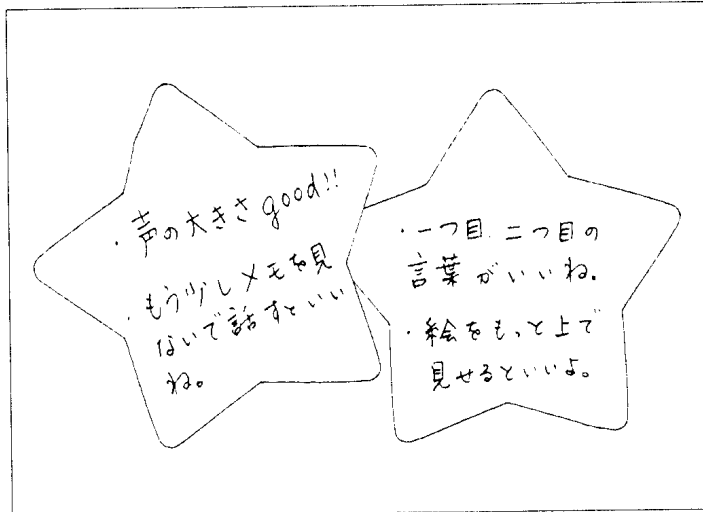
(三) 教師による評価と支援の
在り方及び仲間同士の認
め合いの場の位置づけ

スピーチメモを作り、仲間や環境とかかわりながら繰り返し練習に取り組んでいる子供たち。そんな子供たちに「上手に話せるようになったよ。」「話してよかったな。」という

思いをもたせたいと考えた。そこで、練習場面での評価と支援の在り方、発表会での認め合いの方法を工夫した。

スピーチ練習の場では子供たちは真剣に練習に取り組んでいるが子供たち全員に教師が声かけを行うことは大変難しい。これまでも練習の途中で声をかけてしまい、スピーチが中断してしまうことがあった。しかしできるだけ多くの子供たちのよさや頑張りを認め励ますことは、スピーチを高め自信をもつために必要である。そこ

(資料Ⅶ) 支援カード (例)



で支援カードに子供たちのよさや頑張り、もう一歩の点を記して渡すという支援に取り組んだ。(資料Ⅶ) このカードを用いたことで、子供たちのスピーチを途切れさせることがなくなり、また子供たちもカードを見て、自分の話し方を意識して練習に取り組むことができた。そして何よりも声をかけて支援していたときよりも多くの子に支援す

ることができた。子供たちの中には、自分のスピーチのよさが文字として残ることへの喜びを感じる姿が見られたことから、カードを使った支援は有効であったと考える。

発表会においては、「よかったよ&がんばろうカード」を用い、仲間同士の認め合いの場を設定した。認め合いによって「話してよかったな。」という思いが生まれるとともに、仲間のよさを見つけようと真剣に聞くことで子供たちの「聞く力」も育つのではないかと考えた。(資料Ⅷ) に示すのは「手と心で読む」「あったらいいなこんなもの こうなったらいいな柳津町発表会」でのA子からS男へのカードである。カードの項目②には、「あったらいいなこんなもの こうなったらいいな柳津町発表会」で取り入れることとした表現の工夫を用いた。また項目③④においては、その他のよさやがんばるとよいところが評価者の言葉で残るよう、文章での表現とした。

S男は視覚障害者に焦点をあてて考えづくりをし、「柳津町に音のなる信号機があったらいいな。」を主張としてスピーチをした。A子はS男の声の大きさと考えのよさを認めている。S男だけではなく、多くの子がこの評価カードを嬉しそうに何度も読み、中にはカードを友達と交換して読み合う姿も見られた。

(資料Ⅷ)「よかったよ&がんばろうカード」

大事などころを落とさず

「あったらいいな」の柳津町発表会

「よかったよ」と「がんばろう」カード

①	「あったらいいな」	柳津町にも正月のなる信り
△	ア 話の中心がきちんと分かるように話していたか。	
○	(何を言いたいのか、はっきりしていたか。)	
◎	イ 資料(図や絵、本など)を使って話していたか。	
②	ウ 問いかけの言葉を入れて話していたか。	
③	「考えた話」	と、大きな声ででたが、うさとして、もういと思ん、たしかに正月のなる信り、てたらいいネ、
④	「みんなの」	資料を見せるときにも、もつと上の方にしたら、見やすかったと思ん、うさ、あと一歩だね、
⑤	先生から	うなすきながら友達の話を聴くすかた、よか、たよ、話の大きさも、がんばらね、たね、

四、成果と課題

国語科学習の様々な場面でスピーチを取り入れた授業を創造し、仲間や環境とかわる学習活動を仕組み、評価と支援を工夫したことによって話すことに喜びをもつ姿が多く見られた。さらに、その喜びは冒頭のA子の姿のように日常生活でも生きてはたらく力へとなってきた。

今後さらに、国語科学習での力が日常生活へと生きてはたらくよう、実践に取り組んでいきたい。

実践記録を読んで

高橋 弘

筆者の若岡朋美さんは、本学教育学部国語科を平成八年三月に卒業、同年四月から、本学と同じ柳津町内にある柳津小学校に勤務し、この三月で教職三年目を終わろうとしている。昨年度には、羽島郡教育実践記録に応募し、新人の部で奨励賞を受けている。

本学国語国文学会誌「国語国文学」に、学会員であった本学卒業生の論考や実践記録が掲載されるようになってから今回で三年目に入る。卒業研究として取り組んだ内容をさらに深化発展させたり（第16号・小林広美「和良村の農村歌舞伎舞台」^注）、教育現場での日々の実践から課題を見出し、それを研究的に解明しようと試みたり（第16号・青山陽子「聞く・話す指導の実践」、第17号・永井伸幸「豊かな表現で相手に伝わる話し方ができる子の育成を目指して」）など、卒業した学会員が学会誌を通してつながりを保っていこうとされていることは、本学国語国文学会の今後を考えたとき、喜ばしい現象ではないかと考える。

注 論文は、小林さんとその指導教官である本学安田徳子教授との連名で、小林さんの論文に安田教授が加筆、まとめられたものになっている。

今回の若岡さんの実践記録の表題は、「話す喜びや自信が生まれる国語科学習——スピーチを取り入れた授業の創造——」である。「話す」という言語活動は、同時に「聞く」という言語活動をともなうことを考えれば、本学会誌に掲載された実践記録は、期せずして、三年連続して「話すこと・聞くこと」をテーマとしたものになっている。学会誌編集者の方から「話すこと・聞くこと」をテーマとして求めたわけでもないのに、寄せられた実践記録が「話すこと・聞くこと」に集中しているというのは、今、小・中学校の国語科

習で、「話すこと・聞くこと」の指導がいちばん問題になっている、ということであろう。別の言い方をすれば、これまでの国語科学習で「読むこと・書くこと」、特に「読むこと」の指導が中心に考えられてきたことに対して、「国語科教育はそれでいいのか」という問題が投げかけられている、ということであろう。このことは、昨年末公示された新しい学習指導要領でも、国語の「目標」の中に、「……伝え合う力を高める……」という文言が入るなど、話すこと・聞くことの指導を手がかりとして、新しい国語科指導の在り方を探求していこうとする方向と重なってくることになる。

話すこと・聞くことの指導については、前回までに青山、永井お二人の「実践記録を読んで」の中で述べたので、今回の若岡さんの実践記録については、今後の指導の方向という観点から、二つ取り上げて述べてみたい。

（一）表題にある「話す喜び」について

若岡さんは、「一、はじめに」の中で次のように述べている。

（子供たちは）休み時間になると、……「話したい」「聞いてほしい」という思いをいっぱいをもって目を輝かせながら教師のところに来てくれる。しかし、いざ授業の場面になると……話すことが大好きで休み時間や給食の時間にはあんなに生き生

きと話す子供たちが、なぜ授業になると話せなくなってしま
のだろうか。……

日常生活のなかで「話したいな」という思いをいっぱいにもっ
ている子供たち。そんな子供たちが学級みんなの前で話すこと
に喜びを感じ、…A子のように「話してよかったな」「みんな
の前で話すことって楽しいな」という思いをもつ姿を願ひ、実
践に取り組んだ。

ここには、話すこと・聞くことの学習指導の根底にある、指導に
当たる教師の忘れてはならない見方、考え方があつた。それは、若岡
さんが書いている『話してよかったな』（筆者注・それは同時に
『聞いてよかったな』ということでもある。）『みんなの前で話す
ことって楽しいな』という思いをもつ』ということである。

国語の時間、話すこと・聞くことの指導に当たつて、指導の教師
は、例えば「新学習指導要領」の「第一学年及び第二学年」の、
「A 話すこと・聞くこと」に掲げてある

ア 知らせたい事を選び、事柄の順序を考えながら、相手に分か
るようにはなすこと。

イ 大事な事を落とさないようにしながら、興味をもって聞くこ
と。

ウ 身近な事柄について、話題に沿つて、話し合うこと。

の指導事項、また「言語事項」の

ア 姿勢、口形などに注意して、はっきりした発音で話すこと。
については、「基礎的・基本的な内容の確実な習得」の観点から、
繰り返し、丁寧に指導を重ねるであろう。その結果、指導事項に挙
げられていることが「できるようになった」という「喜び」、そこ
から生まれてくる「自信」をどの子ももつということは、極めて大
切なことである。

しかしそれと同時に、話す、聞くという言語活動が、人と人との
かわりの中で行われるものであることを考えると、「○○さんと
話してよかった」「○○さんの話を聞いて楽しかった」「学級のみ
んなに、わたしの話を聞いてもらえてうれしかった」等々、話す・
聞くという言語活動を、常に子どもどうし、子どもと教師といつた
その場の人と人とのかわりの観点と結び付け、そこから得られる
「喜び」「楽しさ」などを感得させることの大切さも、絶えず念頭に
置かねばならないということである。

この点に関して、今回の小・中学校の学習指導要領と一緒に改訂
が行われた「幼稚園教育要領」の「言葉」の領域で、その「ねらい」
として掲げられた文言は、極めて意味深いものである。

- (一) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (二) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考え

たことを話し、伝え合う喜びを味わう。

(三) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。

若岡さんの実践記録の表題にある「喜び」ということばの意味するものは、今後ますます重視されることになる「話すこと・聞くこと」の指導の際の重要な観点を示しているということである。

(二) 表題にある「授業の創造」について

新しい小学校学習指導要領の「総則」には、

学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、児童に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある教育活動を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに、基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。

と述べた部分がある。この中の「学校」ということばは、ここで求められている重要な内容を実践するのはだれなのかという点において、ともすれば具体的な実践の「主体」をあいまいにしてしまうおそれをもっている。

「学校」は、毎日毎日・一時間一時間授業を行い、一人一人の子どもと直に触れ合う「教師」ということばに置き換えて読まれなけ

ればいけない性質のものである。さらに言えば、一人一人の教師は、「教師」を、「教師であるわたし」ということばに置き換え、また「教育活動」ということばを、国語ならば「国語の授業」に、「児童」ということばは「わたしが担任する学級の子ども一人一人」に置き換えて、

わたしは、担任する学級の児童一人一人に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かし特色ある国語の授業を展開する中で、自ら学び自ら考える力の育成を図るとともに基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、個性を生かす教育の充実に努め……

と読み、ここで求められることを国語の授業で実現していくのは、ほかのだれでもない「このわたし」なのだという決意をもつことが要請されているのである。若岡さんの「授業の創造」ということばは、この要請に応える決意がこめられたものとなっている。

その具体的な現れとして、「スピーチを取り入れた授業」の工夫と実践がなされている。説明文の学習にスピーチを位置づける試みは、これまで教科書教材の内容理解で終わるか、せいぜいそこで学んだ文章構成の方法を利用して作文を書くことで止まっていた授業に、「話すこと・聞くこと」の指導の観点を組み入れたものとしておもしろい着眼である。

また、スピーチの際、子どもが原稿に頼り過ぎて、「話す」活動であるはずのものが「読む」活動になりがちであったことから、メモによる発表への発展的な授業を仕組んだり、「分かりやすく説明するための道具箱」を作成しそれを利用してスピーチを行ったりしたことなども、見通しをもった基礎的・基本的な内容の確実な習得を図っていることとして納得できる。

さらに、自ら学び自ら考える力の育成の観点から興味を引くのは、発表内容を、子どもたちがそれぞれ、読書をしてそこから得た情報をもとに考えたり、町内を調べて歩いたり、視覚障害の体験的活動をしたりしてまとめていることである。また、スピーチを他の学級の友達にも聞いてもらう「なるほど！方言発表会」の設定も、子どもたちの企画を生かしたものであれば、今後の「自ら学び自ら考える力」を育成する指導の方向を示す試みとして参考になるものである。

いずれにしても、若岡さんの実践記録は、今回改訂の新しい学習指導要領の求める国語科学習指導の方向を示唆するものとして意義深いものがある。創意を働かせ、工夫し、情熱に燃えて国語科学習指導の実践に取り組む、若さ溢れる教師として、一層のご精進を祈りたい。